

市史講座第 6 回ミニレポート

9 月 20 日(土)第 6 回の講座が開かれました。

第 1 部 : 「中世後期の出雲と地域権力」(講師:愛媛大学教育学部教授 川岡 勉 先生)



川岡先生はまず、近世における出雲国の中心が松江であるのに対し、中世での出雲国内の政治拠点はどこであるのか、という課題を提示されました。古代の地方行政の中心である国庁に対して、中世の政治拠点は府中と呼ばれ、出雲国の場合は国庁のあった大草町から竹矢・馬潟周辺域を含めた広い地域にあたります。その後、鎌倉時代に入ると守護の活動拠点である守護所の重要性が増していき、文永 8 年(1271)の出雲守護の所領は、東部の富田周辺と西部の塩冶周辺、美保郷と府中に含まれる平浜別宮であり、出雲東部と西部に大きな所領を持ち、流通と国内政治の拠点を支配しようとしていたことが読み取れることを指摘されました。

また、尼子氏の城下町となった富田の評価については検討が必要であり、むしろ守護の変動に伴い、それぞれの拠点到守護所が移動していったことを指摘されました。中世後期に京極氏の出雲支配が続くようになると、守護京極氏は府中に含まれる八幡・馬潟地域との結びつきを深めます。馬潟は府中の外港であると同時に富田の外港として役割を持っていました。その後の富田は応仁の乱に際して攻防の舞台となり、尼子経久と守護京極政経が争いました。

ところで守護と守護代の争いは出雲では守護代優位の形で再編されます。京極政経の死後、後継者吉童子が消息不明となり、尼子氏が支配権を掌握しましたが、尼子氏は府中の八幡に吉童子の母親を居住させ、国内領主の統制を行うようにしたと説明されました。

府中から富田への政治拠点の移転については、戦国の動乱が激化する中で諸国の政治拠点が平地の方形館から山城に移行するという全国的な流れに準じ、富田は内陸に拠るが軍事が優先される中で要塞化が進められたと述べられました。

また富田から松江への拠点の移動については、戦国時代末から宍道湖東岸地域が重視されるようになったことが前提であると述べられました。天文 11～12 年(1542～1543)まで平浜・馬潟など中海西南域が攻防の舞台でしたが、その後、末次・白潟など宍道湖東岸地域が重視されるように変化し、その背景として経済・流通の中心としての末次・白潟の発展を指摘されました。

最後に、中世出雲の政治拠点について、各時期により変動が大きかった事実を述べられました。その理由として、中世において各地に領主が割拠し競い合う社会状況にあったこと、圧倒的な力を持つ勢力がいなかったためであることを挙げられました。

第 2 部：「松江古代史の魅力」(講師:島根大学法文学部教授 大日方克己 先生)

古代の松江ひいては古代出雲の歴史については、『出雲国風土記』や史跡出雲国府跡など目を引く文献史料や遺跡があるため、奈良時代はこれまで多くの本に描かれてきましたが、平安時代について描かれた本はほとんど見られません。しかし平成 25 年 3 月に刊行された『松江市史』の史料編「古代・中世 I」に見られるように平安時代にもたくさんの史料があり、平成 27 年 3 月頃の刊行予定の『松江市史』の通史編第 1 弾となる「自然環境・



原始・古代」では、平安時代について 2 章分を割いて叙述される予定で、今回の通史編の一つの目玉になっています。そこで大日方先生は平安時代のうち 9 世紀の災害と対外意識について講演されました。

講演では、東日本大震災でよく引き合いに出される貞観 11 年(869)の陸奥国における大地震・大津波を中心に、貞観 5 年(863)～仁和 3 年(887)の日本列島は各地で大地震・噴火が多発した地殻大変動の時代で、出雲国でも元慶 4 年(880)に大地震が発生したことを紹介されました。

また、この災害が多発した貞観年間には、新羅海賊船により博多が襲撃されており、これらの災害や被害に対し、貞観 11 年の諸神への告文(天皇の神に対する祈願)で、日本が「神国」であるという意識がはじめてみられるようになったことを紹介されました。

このように貞観期以降の政府は大災害などの被害とその復興という大きな課題に直面しており、これらが承平・天慶の乱(平将門の乱・藤原純友の乱)、摂政・関白の成立、地方財政の破綻や受領制の成立などその後の歴史に大きな影響を与えたのではないかとのことでした。